

ベトナムの孝子説話に関する稀代の研究書

佐藤トウイウエン著
ベトナムにおける
「二十四孝」の研究A5判 512頁
東方書店
[本体7,000円+税]

嶋尾 稔

この本は、ベトナムにおける「二十四孝」の受容と展開に

関する世界初の研究書である。著者の佐藤トウイウエン氏は、ベトナム、ホーチミン市の出身で国立ホーチミン市社会人文学科大学東洋学部を卒業、来日後は大阪大学でベトナム語の講師をつとめながら、関西大学大学院に進み、博士号を取得された。本書は、その博士論文を公刊されたものである。評者の専門はベトナム史であるので、この本が、ベトナム史研究、あるいはベトナムと周辺地域との交渉に関する研究やベトナムと東アジア諸国との比較研究にとって、いかなる意義を持つかという点に注目して、論評してみたい。

まず、本書の構成を示し、各章の内容について、私が注目すべきと考える点を中心に紹介し、簡単な論評を付す。そのあとに全般に関わる論点について述べたい。

序 (吾妻重三)

序論 ベトナムにおける儒教と「二十四孝」

第一部 「二十四孝」とベトナム

第一章 中国の「二十四孝」説話とその系統

第二章 ベトナムにおける「二十四孝」

第二部 李文馥系の「二十四孝」

第一章 李文馥と「二十四孝演歌」について

第二章 「詠二十四孝詩」と中越文化交流

第三章 李文馥系の「二十四孝」と『日記故事』系の

各文献の比較

第三部 李文馥系以外の「二十四孝」

第一章 綿窩皇子と「補正二十四孝伝衍義詞」につ

いて

第二章 『四十八孝詩画全集』と中国の「二十四孝原編」、「二十四孝別集」の比較

第三章 「二十四孝」説話からベトナム独自の『西南
仁道歌』へ

結論

あとがき

参考文献

索引

序論では、著者は、ベトナムの儒学の特徴について先行研究に基づきながら「哲学理論としての儒教」より「社会的教化手段としての儒教」「倫理・道徳としての儒教」を重視したと述べ、その特徴と「二十四孝」の広汎な受容を関連づけて論じている。ここでは日本ではほとんど知られていないベトナムの研究者諸氏の儒教観を見ることができると述べている。

第一部では、この研究で使用される諸資料の全般的な検討が行われている。第一章では、ベトナムが、中国のいかなる「二十四孝」を受容したかを考察する前提として、中国の「二十四孝」の三系統が簡潔に整理されて、ベトナムの「二十四孝」が『日記故事』系であるとの見通しが述べられる。また、ベトナムでは「二十四孝」の作者を郭居業であるとすることが

定説であることが示されている。第二章では、まずベトナムにおいていかに孝思想が重視されてきたかを示すために、ベトナムの法、道徳的教化、祖先祭祀の中にみられる孝思想関連の諸情報を検討され、その上で一九世紀から現在までにベトナムで作られた「二十四孝」が網羅的に提示され、内容の簡潔な紹介がなされている。この部分は、テキストを具体的に検討する第二部、第三部に劣らず重要である。この章の記述から、ベトナムにおいては仏領期に入って漢字漢文が徐々に廃されるようになって、ローマ字表記のベトナム語の出版物として「二十四孝」は刊行され続け、二一世紀に入ってから「二十四孝」の漫画が出版されているという「二十四孝」出版の連続性が知られる。ベトナム文化史のこのような側面は日本のベトナム研究が看過してきたものである。

第二部は、ベトナムの二十四孝を代表する李文馥の「二十四孝演歌」とそれと同時に作成された「詠二十四孝詩」が検討される。第一章では、まず「二十四孝演歌」の作者である李文馥の履歴に関する諸情報が整理され、その上で本文テキストと日本語訳が提示される。「二十四孝演歌」（一八三五年）は双七六八体（七言―七言―六言―八言が繰り返される）と呼ばれるベトナム語の定型韻文であり、字喃と呼ばれる漢字を応用したベトナム固有の文字で記されている。写本でのみ伝え

られているが、著者は『掇拾雜記』所収のものを底本として、その他の写本文献所収のものと丁寧な校合を行い、ベトナム語語彙の語釈とローマ字表記も付している。研究のための基礎資料の提示という不可欠な作業を施した上で、ベトナムの「二十四孝」の日本語訳を紹介するという大変堅実で有意義な仕事である。「二十四孝演歌」は李文馥が阮朝の使節として、広東に滞在していた時に作成されたものであるが、第二章では、李文馥が、同行したベトナム人二人、及び現地中国人とともに二十四孝のそれぞれの話に対しての感慨を唱和した詩が全て紹介されている。ベトナムと中国の文人の知られざる交流の痕跡であり、貴重な情報である。また、「二十四孝演歌」では、ベトナム語部分の先に漢文版が置かれているが、第三章では、その漢文部分を中国の『日記故事』系の諸本と比較することで、李文馥がいかなる文献に基づいて、「二十四孝演歌」を作成したかが検討される。二十四話の配列順序、およびテキストの異同の丁寧な分析により、「二十四孝演歌」の漢文部分が『前後孝行録』（一八三二年の序あり）に収められた「二十四孝原本」と最も類似していることが解明された。画期的な発見といえよう。第三章の後半は、打って変わって、二〇世紀初頭にベトナムで刊行された『二十四孝』の挿絵が、「二十四孝原本」のそれに類似してい

ることを論じるものであるが、評者に絵心がないせいか、やや首肯し難い内容であった。

第三部では、ベトナムで作成された、李文馥系の「二十四孝」以外の孝子説話三種が検討の対象とされた。中国の二十四孝に基づく、綿窩皇子「補正二十四孝伝衍義詞」及び鄧輝燿『四十八孝詩画全集』、並びに、ベトナムの孝子説話を中心にフランスや日本のお話も含む『西南訖進馱孝演歌』が各章で考察されている。『西南訖進馱孝演歌』は南ベトナム時代にローマ字表記版を付した影印（字喃）本が刊行されているが、その他の二文献が本格的に研究されるのは初めてのことである。第一章では、「補正二十四孝伝衍義詞」の作者である綿窩皇子について検討した上で、二十四話の字喃テキストを全て提示し、日本語訳を付している。綿窩皇子は阮朝二代皇帝明命帝の多数の男子のうちの一人であるが、この皇子がこれまで注目されたことはおそらくない。著者は、この皇子がその子供達とともに『孝経』、「二十四孝」のベトナム語版を作成したことを資料的に明らかにしているが、従来の研究が着目してこなかった阮朝皇族の文化活動に光を当てる重要な情報である。字喃テキスト（双七六八体）の全文が紹介され日本語訳が付されている。李文馥のベトナム語版とは全く異なるものであることは、日本語訳からも明らかに知ることがで

きる。第二章で扱われる『四十八孝詩画全集』（一八六七年度）には「二十四孝原編」と「二十四孝別集」が含まれているが、それぞれ『三余堂叢刻』（一九二七年）所収の「二十四孝原編」、「二十四孝別集」と類似していることが指摘されている。ベトナムの「二十四孝」受容の考察に示唆を与える新たな情報提示であり、とくに『日記故事』系ではない孝子説話である「二十四孝別集」がベトナムに知られていたとの指摘は重要である。

第三部第三章で扱われる『西南仁道歌孝演歌』は、その他のベトナム版「二十四孝」とは趣を全く異にする。フランスによる植民地化以後、対仏協力者として知られる黄高啓が、親仏派の『東洋雜誌』に発表した孝子物語のシリーズ（散文）を、張甘榴が韻文に直し、その両者を合わせて刊行したものと

中国桂林鍾乳洞内現存 古代壁書の研究

□ 新刊 □
戸崎哲彦 著 古来多くの文人墨客を魅了してきた中国桂林の夥しい数の摩崖石刻はつとに有名だが、鍾乳洞内の石面に唐宋人が直接毛筆で記した壁書、落書きの存在は殆ど知られていない。近年、観光客の激増により消滅の危機に瀕している肉筆・肉声を伝える貴重な文物の克明な記録から始めてその価値を説き、保護を訴える。■15741円

漢帝国成立前史 —秦末反乱と楚漢戦争—

柴田昇 著 約四百年にわたって続き、後の中国王朝の原型となった漢帝国は、どのようにして始まったのか？ 秦末の社会状況と陳勝吳広の乱に代表される民衆反乱の発生から、項羽・劉邦の登場、秦帝国の滅亡、項羽の分封、そして楚漢戦争の終結に至るまでの歴史的過程を再検討し、統一王朝誕生の実像に迫る。■2000円

白帝社 ※価格は税別
〒171-0014 東京都豊島区池袋 2-65-1
TEL 03-3986-3271 FAX 03-3986-3272
http://www.hakuteisha.co.jp

である。本章は、その散文部分（字喃）を全て紹介し、日本語訳を付している。ベトナムの歴史上の人物や阮朝期に孝子として表彰された人物が多く含まれており、中国の孝子説話より記述が具体的であることが見て取れる。著者は、この説話集の特徴を述べる中でベトナムにおいて親への孝だけではなく国家に対する孝も重要であったとの説を引く。また、ベトナムの孝が父母だけでなく祖父母へとひろがり、祖先祭祀と深い関係を持つことが強調される。興味深い論点であり、

植民地化前後の持続と変容、東アジアの諸地域との比較といった視点から考察が深められることが期待される。以下は全般的な論評である。ベトナム阮朝が情報収集と航海演習のために公船を東南アジア諸国や広東に派遣したことはベトナム史研究では周知のことであるが、著者は、「二十四

「孝」の作者たちが、この外洋公務に従事し各地を訪問していた「国際派」であることを明らかにしている。中でも広東との関係が重要である。李文馥が「二十四孝演歌」を作成し、無名の中国地方文人と交流し、二人の同行ベトナム人も含めて五人で詩を取り交わしたのは、広東滞在中のことである。鄧輝燿が、『四十八孝詩画全集』の序を記したのも広東においてである。ベトナムと中国の文化交流にとっての広東の重要性にこの本は目を開かせてくれる。

この本は、ベトナムの「二十四孝」の受容について重要な情報を与えてくれる。しかし、李文馥の「二十四孝演歌」作成以前のことがいまだよくわからない。著者の網羅的調査でも見つからない以上、これ以前のベトナム版の「二十四孝」は存在していなかった可能性は高い。しかし、「二十四孝」自体がベトナムで知られていなかったわけではあるまい。著者の引用する李文馥の「二十四孝演歌引」(二〇〇頁)にも、幼い頃に「二十四孝」を習った思い出が語られている。このような断片情報から、一八世紀以前のベトナムの「二十四孝」受容の状況を僅かなりとも明らかにできないだろうか。

この本がベトナム文化史研究および東アジア文化交流学に新たな刺激的な知識をもたらしてくれたことは疑いない。もちろん検討すべき点は残されているが、それも今後の研

究課題を示してくれたものといえる。この本を出発点としてベトナム儒教に焦点を当てた研究が一層進展することを祈念したい。

最後になるが、東方書店が、漢字、カナ、字喃、ベトナム語の声調符号付きローマ字が混交する異例の書物を刊行したことの出版史上の意義も忘れてはなるまい。

(しまお・みのる 慶應義塾大学)